

羅針盤



社会科部 情報活用委員会

お祭り考…地元のお祭りを見直す

社会科部長 杉田 吉男

六ツ美中学校に転勤して驚いたことは、地域のお祭りの多さです。4月には、早速、2か所の神社の大祭(祈年祭)に参加しました。

そして、秋。なんと17の町からお祭り(例大祭)の案内が届きました。今年度はすべて参加しようと考えていましたが、日程調整ができずに、3か所については役職の先生に代わりに参加してもらいました。ですから14か所のお祭りに参加したことになります。調べたことはありませんが、これだけ多くのお祭りに参加している学校は、市内にはないと思っています。

お祭りに参加すると、そこに住む人たちが地域の神社を守っていこうと努力していることがよく分かります。そして、神様に見守ってもらっているという意識も息づいており、参拝をする人が減っているとはいえ、今でも神社は地域のシンボルになっていると思います。

また、六ツ美地区では、「皇太神宮御田扇祭」(通称「扇さん」、岡崎市無形民俗文化財指定)が継承されています。約400年続いているこのお祭りは、岡崎藩独自の手永制度(1万石ごとに大庄屋に管理をさせる)という支配体制と関わりの深いお祭りです。岡崎藩は六つの手永に分けられており、それぞれで御田扇祭を行っていました。そして、御神輿が毎年1村ずつ渡御することになっていました。時代の変遷により、現在行っているのは「山方手永」と「堤通手永」のみとなりました。今年、六ツ美地域では、堤通手永の「上合歓木町」から「下合歓木町」に田扇の御輿が渡りました。地域の方に話を聞くと、「費用も労力もすごくかかるので大変だけど、これまで大切にしてきたものを守っていかなくてはいけない」と言われました。地域に対する強い思い、地域愛を感じた瞬間でした。

しかし、御田扇祭にしても、各地域のお祭りにしても、なかなか若い人に参加してもらえないという課題を抱えています。子供たちが、地域に愛着を持ち、地域に貢献できるようにするためにも、祖先が肅々と繋いできた身近な地域のお祭りにも目を向ける必要があると強く感じました。



「皇太神宮御田扇祭」の様子

おかざき学習実践報告

【城南小学校】<6年生>「岡崎の偉人を学ぶ～つなげ！ 僕らの地域と徳川家康～」の実践

今年、岡崎市は家康公顕彰400年を迎えました。小学校6年生の「おかざき学習」では徳川家康が取り上げられ、家康公の生い立ちや歴史上の事実だけでなく、家康の思いや家臣の働きが6年郷土読本「おかざき」には記載されています。そこで、子供たちが、より意欲的に学習に取り組めるように体験学習を中心にした独自の単元を組み、実践を行いました。その中から、『葵武将隊』を招いた授業の実践を報告します。

まず、郷土読本「おかざき」を使用し、徳川家康の生い立ちや遺訓、家臣についての知識を身に付けました。その後、家康の家臣が、それぞれどのような立場であったのかを押さえるために、『葵武将隊』をゲストティーチャーとして呼びました。当日来校した家臣は、本多忠勝・榊原康政・井伊直政・服部半蔵の4名で、武将隊のパフォーマンスを見た後、各家臣の立場から見た家康の人物像について話がありました。

武将隊による授業で、家康は戦乱のない平和な世の中を作りたいと願い、家臣たちがその家康の思いに共感し、家康を支えていたことがわかりました。そして、その支えこそが家康と家臣の強い信頼関係を物語っているということが理解できました。また、本校の学区には、家康と関わりのある寺があるので、見学に行き住職さんから話を聞くことができました。

これらの体験的な学習を通して、実際に見たり聞いたりすると、その当時のイメージをはっきりとつかむことができ、偉人の思いにも迫ることができるとわかりました。今後も、体験的な「おかざき学習」の実践を計画していきたいと思っています。

(辻村堅吾)



葵武将隊との記念撮影の様子

【本宿小学校】<6年生>「徳川家康の生き方について考えよう」の実践

春の遠足で子供たちは、大樹寺・岡崎城・三河武士の館を訪れたことから、徳川家康についての関心を高めました。この機会を生かし、郷土読本「おかざき」を活用して、「おかざき学習 徳川家康の生き方について考えよう」の実践を行いました。

まずは、関ヶ原の戦いに勝利するまでの家康の年表から家康が苦労したと思われることを読み取り、意見交換をしました。子供からは、長い年月人質生活を送ったこと、幼い頃に母親と生き別れたこと、三方ヶ原の戦いで武田信玄に大敗したこと、秀吉に命じられて関東へ領地替えさせられたことなどがあがりました。その際、事実を確認するだけでなく、それぞれの出来事について、家康の気持ちを想像することも行いました。子供からは、「3才の時、お母さんとはなればなれになってしまいかわいそう」「ぼくと同じ年の頃、お父さんやお母さんと暮らせないなんて、さびしかったと思う」「人質生活が長くてこわかったらうな」といった意見が出されました。

次に、徳川家康の遺訓を分かりやすい言葉にしたものといっしょに読んでいき、内容の理解を進めました。子供たちは自分の生活と比べながら、発言したり、記述したりすることができ、子供たちが家康の遺訓から自分の生活をよりよくしていこうと考えていることが分かりました。以下は、子供の感想の一部です。

- ・けんかをしたとき人を責めてしまうことがあるけれど、遺訓を読んで、人を責めてはいけないということがわかりました。
- ・家康は小さいころから人質生活を送ってきたから、強いなと思いました。
- ・家康の遺訓を参考にして、人を傷つけないようにしていきたいです。

授業後は、遺訓を暗唱する取り組みを行い、全員が暗唱することができました。

(鶴田秀幸)

【城北中学校】<2年生>「家康公の生いたちと思い」の実践

城北中学校区には、岡崎城をはじめとして伊賀八幡宮など、家康公関連の史跡が豊富にあります。また、家康行列など、実際に生徒が参加している関連イベントもあります。さらに、1年生の総合的な学習の時間を通して、地域を対象として追究活動も行っています。その中に、地域の歴史・史跡・家康公もテーマとして取りあげています。そこで、生徒たちとイメージマップを作成し、家康公について発表していくことにしました。発表された内容は、生徒たちの日常生活で目にするものと経験したことがほとんどでした。

その実態を踏まえ、郷土読本を用いて家康公の生いたちを調べ、その生き方について考えを発表しました。以下に生徒たちの授業感想の一部を載せます。

(城北中 小松享史)

【感想】

- ・ 幼い頃の人質という恐ろしい記憶があったにもかかわらず、あきらめずに天下を目指すという強い思いがあったのは、すごいと思う。やっぱり戦がたくさんあって、みんなが嫌な思いをするのは、あまりいい世の中じゃないと思う。そういう世の中よりも、みんなが仲良くしてあって、平和に過ごした方がいいと思う。そういう時代(260年間戦がない時代)の基礎を作ったことはすごいこと、ありがたいと思う。
- ・ 徳川家康公は、みんなのことをよく考え、優しくしてくれる人なんだと思った。そしてそれを、家臣やのちの時代の人たちが受けつごうと思ってくれるくらい、信頼されていたのはすごいと思う。
- ・ 日本のだいたいの人を知っている、そんな偉い人が自分たちの住んでいる地域の人であることは、誇れることだと思う。こんな地域はあまりないので、自分たちは恵まれていると思う。また、家康行列やピスタラインとか、様々な関係した事や場所などがある。岡崎城に行くことも多いけど、もしかして私たちは家康公や家臣の人たちが歩いたところを歩いているのかもしれない。それは、ほかの地域ではできない体験であり、ここに住んでいるからこそだと思う。それを当たり前と思わずにありがたいと思い、自分たちの地域を大切にしていきたい。

【福岡中学校】<2年生>『天下餅の歌』から徳川家康の生き方に迫ろう

「織田がつき、羽柴がこねし天下餅、座りしままに食うは徳川」の歌では、徳川家康の天下統一までの苦難や苦労が伝わってきません。そこで、この歌を導入で提示し、以下のように天下統一までの道のりを問題解決的に展開することで、生徒の批判的な思考力の育成を図りました。

- ① 「織田がつき、羽柴がこねし天下餅、座りしままに食うは徳川」の歌を提示し、感想交流をする。
→ (生徒の感想)「座りしままに」は「何もせずに楽をしている感じがする」「待っている感じがする」「苦労を感じない」
- ② 「人質時代の様子」「三河一向一揆への対応」「築山事件での行動」の三つのシーンを設定し、それぞれの場面で家康がどう対応したかを副読本「岡崎」から読み取り、その行動から家康の人物像に迫る。
→ (生徒の感想)「寂しい人、我慢強い人」「心の広い人、家臣を大切にする人」「悲しみに耐えた人」
- ③ 追究した人物像から「座りしままに」に代わるキーワード(7文字)を、グループごとに発表する。
→ (生徒のキーワード)「がまんし、たえて」「かけひき上手」「苦労を重ね」「苦難を超えて」「平和を望み」「涙ながらに」

【授業後の感想】

- ・家康は腹黒い印象だったが、結構我慢して努力家だと思った。
- ・座っていただけではなく、たくさんの出来事に耐えて、すごい人だと思った。
- ・悲しみに耐えた家康に感動した。涙は、悲しみと喜びの二つの意味を持つと思う。
- ・別の班の意見を聞いて、違う面にも気付くことができた。納得できた。

今後も、事象をとらえ直し、生徒の考えを深め、問題意識を高められるような授業構成を工夫していきたいと思います。

(山内浩美)